



大学生の「カタリ場」への参加と時間的展望
－「ナナメの関係」が学生に与える影響に焦点を当てた検討－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校 公開日: 2020-03-25 キーワード: 作成者: 半澤, 礼之, 江口, 彰, 宮前, 耕史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008569

大学生の「カタリ場」への参加と時間的展望 - 「ナナメの関係」が学生に与える影響に焦点を当てた検討 -

半澤 礼之¹・江口 彰²・宮前 耕史¹

¹ 北海道教育大学 教育学部 釧路校 ² 特定非営利活動法人いきたす

The Time Perspective of College Students who Participated in "KATARIBA"

HANZAWA Reino¹ EGUCHI Akira² MIYAMAE Yasufumi¹

¹ Hokkaido University of Education, Kushiro Campus ² Nonprofit Organization IKITAS

1. 問題と目的

本研究は、「カタリ場」に参加した大学生がその体験を通じて自らの過去や未来をどのように展望したのかについて探索的に検討することを目的としている。以下に、「カタリ場」の概要、その特徴のひとつである「ナナメの関係」について、そしてそれが影響を与えると考えられる大学生の「時間的展望」という概念について述べる。

「カタリ場」とは

「カタリ場」とは、認定特定非営利活動法人カタリバが実施するキャリア総合学習の呼称（上阪,2010）である。上坂（2010）では、それを実施する団体・組織がカタリバ、高校生を対象とした具体的なプログラムが「カタリ場」と区別されている。本研究もその区別に従うこととする。

「カタリ場」では、組織化され、トレーニングを受けたボランティアの大学生がチームを組み、高校生の話を聞いたり、高校生たちに自分たちの経験や思いを伝えたりする大規模な「授業」を行う（上阪,2010）。本研究は「カタリ場」のプログラムそのものを対象としたものではないため、その具体的な内容は上坂（2010）や大坪（2011）を参照されたい。概要を述べれば、「カタリ場」とは大学生を中心としたボランティアが要請に応じて高校を訪問し、高校生の話を班別に引き出した後に、大学生が自分の体験談を紙芝居方式でプレゼンして（自分の例を示すことからサンプリングと呼ぶ）、最後に両者が一緒になって目標を約束する活動である（宮町,2014）。

今村（2009）によると、高校の生徒たちのモチベーションを引き出すために最も効率的な方法としてカタリバが出した仮結論は「身近な憧れの人を」を見つけることであり、それは指導者と非指導者という利害関係のあるタテの関係からは生まれにくく、また、たくさんの「他人から見られている自分」を意識しながら生活しているヨコの関係の友達関係からも生まれにくい。そこで重視されるのが親でも教師でもない、本人にとって利害関係の薄い第三者との関

わり（上阪,2010）である「ナナメの関係」である。カタリ場に参加するボランティアの大学生は高校生にとって「ナナメの関係」をもった存在だといえるだろう。

この「ナナメの関係」については、高校生や大学生を対象としたピア・サポートの研究においても重要性が指摘されている。枝廣（2011）は、笠原（1977）の「甥-叔父」といった「斜めの関係」という概念を参照しながら、高校生と大学生のような「異年齢間の中立的関係」を「ナナメの関係」としている（枝廣,2012）。そして、この関係を有することが高校生の自我発達に正の影響を与えること（枝廣,2011）、また、目標志向性や希望（白井,1997）といった未来に対する展望に対して正の影響を与えることを明らかにしている（枝廣,2012）。

高校生と大学生の「ナナメの関係」が大学生に与える影響

「ナナメの関係」をその特徴のひとつとして持つカタリ場は、高校生に対するキャリア教育という位置づけを有している。したがって、それが語られる場合には第一にキャリア教育の対象となる高校生に焦点が当てられることが多い（たとえば今村,2009；大坪,2011）。そこで展開されている「ナナメの関係」についても、学校や教育の文脈においてそれを検討した研究の多くは、年上-年下関係における年下に焦点を当てていると言える（竹内・池島,2011；枝廣,2011,2012；澤田,2019）。

ここで、カタリバ成立の経緯やそこで展開されている活動について詳細な記述のある上阪（2010）において、その活動における大学生のモチベーションの高さが言及されている。また、高大接続の事業として大学に「カタリ場」を導入した宮町（2014）の事例においては、事業終了後の自由記述調査において、学生が自らの成長に言及しているという結果が得られていた。認定特定非営利活動法人カタリバ自身も、大学に対して、主体的に行動する大学生を育てるために「入学前教育」「初年次教育」「キャリア教育」「入試広報」の4つのステージで、ナナメの関係を

活用したプログラムを開発・提供している (<https://www.katariba.or.jp/activity/project/katariba/>)。

以上の点から、「カタリ場」の中で展開されている「ナナメの関係」を理解する上では、従来の実践や研究の多くが焦点を当ててきた年上-年下関係における年下だけではなく、年上にも焦点を当てる必要性が導出されるのではないだろうか。この年上とは、「カタリ場」の文脈においては大学生や専門学校生を指す。以上の議論より、「カタリ場」の中での高校生と大学生・専門学校生の「ナナメの関係」が大学生に与える影響についても検討する必要性が示唆される。

カタリ場における「ナナメの関係」から影響を受ける要因としての大学生の時間的展望

これまでの「ナナメの関係」を対象とした研究によって、その関係が青年の希望や目標志向性(枝廣,2012)、未来展望(枝廣・小原,2017)に正の影響を与えることが明らかになっている。そしてその背景として、「ナナメの関係」において年上が年下にとっての未来の自己像として機能している可能性が指摘されている(枝廣,2011)。このように、年上との関係が青年の未来の展望に影響を与えるのであるならば、年下との関係は、過去の展望に影響を与える可能性があるのではないだろうか。「ナナメの関係」において年下の者と関わることが、個人の時間的展望(Time Perspective)のうち、特に過去展望に影響を与える可能性について検討する必要性がここから導出される。

時間的展望とは、「ある一時点における個人の心理学的過去、および未来についての見解の総体(Lewin,1951)」と定義される概念である。その未来の側面について都筑(1999)は、「個人が自分の未来をどのようにとらえ、未来において何を実現しようと欲しているのか」と述べており、ここから、この概念が個人の未来や過去に対する認知や態度といったものを指していると考えられる。また半澤(2016)は、Lewin(1942)や都筑(1999)、白井(2001,2010)、石川(2013)などの時間的展望の研究を参照しながら、過去や現在、未来は関連し合っており、その総体として個人の生活空間を捉える必要性を指摘している。ここから、「カタリ場」における「ナナメの関係」は、先述のように過去展望に影響を与えるだけではなく、上記の関連を通して現在や未来の展望にも影響を与える可能性が示唆される。

本研究の目的

これまでの議論より、本研究は「カタリ場」にキャスト^{*1}として参加して高校生と関わった大学生が、そこでの「ナナメの関係」からどのような影響を受けるのかについて検討を行う。ここでは、影響を受ける可能性のある要因として、彼らの時間的展望に着目する。過去展望への着目を第一としながら、過去・現在・未来の関連についても分析の

対象とする。また、「カタリ場」を対象とした研究や「ナナメの関係」における年上の変化に焦点を当てた研究が多くないことから、本研究は面接調査によって事例を収集して探索的な検討を行うこととする。以上の検討を通じて、大学生が「カタリ場」に参加しそこで「ナナメの関係」を経験することが、彼らの時間的展望にどのような影響を与えるのかについて、基礎的な資料を得ることを本研究の目的とする。

2. 方法

調査時期：2018年8月～9月

調査対象者：2018年8月に「カタリ場」にキャストとして参加した教員養成大学の学生19名のうち面接調査への参加を許諾した7名の中から、今回初めて「カタリ場」に参加する6名を分析対象とした(男性1名、女性5名 全て大学2年生)。

調査手続き：面接は、調査対象者が所属する大学の教室で行った。そこで、「『カタリ場』に参加した感想」、「参加してどのようなことを考えたのか」、「参加したことで自分が変わったと感じたことはあるか、あればそれはどんなところなのか」、「今後も『カタリ場』に参加したいと考えているか」、「参加したプログラムについてどのように考えたか」といったことを尋ねる質問を主とする、半構造化面接をおこなった。面接にあたっては、調査協力者の了承を得て録音を行い、それを文字起こししたものを発話データとして分析の対象とした。面接の平均時間は56分であった。

本研究で対象となったプログラムの概要：本研究で対象となった「カタリ場」のプログラムは、認定特定非営利活動法人カタリバより北海道での運営を任されている「特定非営利活動法人いきたす(<http://www.ikitas.net/>)」が企画し、実施したものである。高校に向かう「カタリ場」当日とその前に2泊3日で行う事前研修会で構成されていた。今回のプログラムに参加した大学生の多くはキャストとしてカタリ場に参加した経験がなかったため、既に経験を有している学生のキャストから研修を受ける必要があった。そのため、2泊3日で事前に宿泊研修をして、キャストとしての基本的な態度や力を身につけた上で高校生との「カタリ場」に臨むというプログラム構成になっていた。事前研修は、「カタリ場」の趣旨についての講義と、大学生を高校生に見立てて擬似的に「カタリ場」を体験する実地訓練の大きく2つからなっており、いずれも「特定非営利活動法人いきたす」にボランティアとして関わっており、「カタリ場」の経験が豊富な大学生の企画・運営で進められた。実際に高校生と「ナナメの関係」で関わる「カタリ場」自体は上阪(2010)や大坪(2011)、宮町(2014)、カタリバ(<https://www.katariba.or.jp/activity/project/katariba/>)で述べられているプログラムと同様であったが、カタリ場の運営主体により準備や研修の方法が様々であることから、今回の調査対象者は「特定非営利活動法人いきたす」独自の研修

を経験した学生であったと言える。

倫理的側面への配慮：調査対象者には面接の目的を説明した上で、データは個人が特定できない形にし、研究目的以外では用いないこと。データの管理は調査者が行い、インターネットに接続していないPCで保存することを伝えた。また、面接中は、回答したくない質問には回答する必要がないこと、面接を途中で終了しても構わないことについても説明した。以上の説明をしたうえで、調査に同意する場合には同意書にサインをしてもらえるよう求めた。その結果、本研究で対象となった調査対象者の全てが同意書にサインを行った。

3. 結果と考察

得られた発話データについて、「高校生との関わりが大学生の時間的展望に与える影響」という本研究の目的に従う形で、エピソードを整理し分類をおこなった。手順としては、初めに過去展望に関わる内容が含まれるエピソードを抽出し、グループを作成した。そこから、過去展望のみが含まれているものと、過去だけではなく現在や未来といったほかの時制も含まれているものという基準で分類を行った。また、過去展望が含まれていないエピソードは別のカテゴリとして分類をおこなった。

以上の手順で分類した結果をTable1に示す。カテゴリが4つ得られ、そのうち1つには更に下位カテゴリとして、小カテゴリが2つ存在していた。

カテゴリの1つ目として、「カタリ場」を体験することによる【過去の振り返り】が得られた。このカテゴリは更に[過去の進路選択の振り返り]と[過去の悩みとの関わり方の振り返り]の2つの小カテゴリから構成されていた。2つ目として、先の【過去の振り返り】を前提とした、【過去を振り返ることによる未来の展望】というカテゴリが得られた。3つ目として「カタリ場」に参加した結果考えることができた【高校生との対話による未来展望】というカテゴリが得られた。最後に4つ目として、以上3つのカテゴリを前提とした【高校生のとときにカタリ場に参加

したかった】というカテゴリが得られた。

初め3つのカテゴリは「カタリ場」にキャストとして参加したことによる個人の過去や未来の捉え方の変化として理解できるものであり、最後の1つは、過去展望が含まれているものの、そのような変化を引き起こした「カタリ場」に対する評価を示すカテゴリであると考えられる。以下に、それぞれのカテゴリについて説明を行い、当該カテゴリが表れていると考えられるエピソード例を示す^{*2}。

各カテゴリの特徴

【過去の振り返り】について

このカテゴリは、「カタリ場」の中で「ナナメの関係」である高校生と関わることで、自分の過去を振り返る契機となったことを示すものである。このカテゴリは、[過去の進路選択の振り返り]と[過去の悩みとの関わり方の振り返り]の2つの小カテゴリから構成されていた。以下に、それぞれのカテゴリについて説明を行う。

[過去の進路選択の振り返り]は、高校生の進路の悩みを聞く中で自分が高校時代に行った進路選択について振り返ること、言い換えれば過去の経験に対する現在の視点からの問い直しを表れているカテゴリであるといえる。「カタリ場」が高校生に対するキャリア教育の側面を持っていること（上阪,2010）から、その中で進路に関わる話題が多く出された結果として、自らの進路選択についても振り返りが生じたのだと考えられる。Table2に、このカテゴリが含まれると考えられるエピソードを2つ示す。エピソードにある調査対象者とは本研究で対象となった大学生を指し、調査者とは面接を行った者を指す。また、括弧内の記述は筆者による補足である（以下、全てのエピソードと同様）。

Table1. 「カタリ場」における「ナナメの関係」が大学生の時間的展望に与える影響のカテゴリ

カテゴリが示すもの	カテゴリ	下位カテゴリ	カテゴリの説明
	過去の振り返り	過去の進路選択の振り返り 過去の悩みとの関わり方の振り返り	「カタリ場」の中で高校生と関わることで自分の過去を振り返る契機となったことを表すカテゴリ
カタリ場参加が大学生の時間的展望に与えた影響	過去を振り返ることによる未来の展望		【過去の振り返り】を前提としながら、「カタリ場」の参加によって得られた振り返りが現在の自分の変化をうながし、その変化に基づいて自分の未来を展望しようとするにつなげた様子を表すカテゴリ
	高校生との対話による未来展望		【過去の振り返り】は語られず、高校生とのやり取りが未来を展望するきっかけになったことを表すカテゴリ
カタリ場に対する評価	高校生のとときにカタリ場に参加したかった		「カタリ場」にキャストとして参加した結果、高校生のとときに受講生として経験したかったという気持ちになったことを表すカテゴリ

Table2. [過去の進路選択の振り返り]が現れているエピソード

エピソード 1
調査対象者：個人的には高校生のときにあれ（カタリ場）を体験してたらまた違った進路を考えたかもなって思うので。 調査者：そうなんだ。それはどうしてそう考えるのかな。 調査対象者：なんかもう、大学生と関わったことがなかったの、大学でどんなことをするのかも知らなかったし。なんていうか、はば、幅っていうか、もちろん（進路の）選択肢は色々あったりは勿論だと思うんですけど、自分の中ではわりと絞られてたので。でもそれが絶対これになるんだ（この職業に就くんだ）って感じじゃなくて、なんとなくみたいな感じだったの。なんか、はい。話を聞いて考えるきっかけってのがなかったの。高校ときは。
エピソード 2
調査対象者：やっぱ、高校生って進路の悩みがあるじゃないですか。話すときそういうの出てくる。あそこでそれを聞いてたら、ああ、自分も昔悩んでたなって、そう思って。でも、結局自分は、自分が行けそうな大学って、で、先生になるのがいいんじゃないって親に言われたりして、そういう、よく考えたら、自分からちゃんと選んでこなかったのかなとか思ったりして。 調査者：進路を自分で選んでこなかったと感じたの？ 調査対象者：あ、でも、もちろんどの大学にするかとか、なんか、本当に先生でいいのかなとか、そういうのは考えましたよ。でも、あそこで高校生と話したら、あと、サンプリングしてた大学生の話もそうなんですけど、しっかり自分で悩んだのかなって、そこがちょっと疑問になったりして。今のここ（大学）が嫌だってわけじゃないんですけどね。なんか考えるきっかけになったっていうか。 調査者：何を考えるきっかけ？ 調査対象者：昔の自分ですね。どんなんだったかなーって。ちゃんと悩んで選んだのかなーって。まあ、もう今ここにるので、結果としてはよかったんだと思ってますけど。

次に、[過去の悩みとの関わり方の振り返り]は、進路選択に限らない様々な悩みについて、自分が過去にどのように関わっていたのかについて振り返ることを表しているカテゴリであると考えられる。「カタリ場」では、進路以外の悩みが語られることも多い（上阪,2010）。このカテゴリはその結果として表れたものであると言えるだろう。Table3に、このカテゴリが含まれていると考えられるエピソードを2つ示す。

Table3. [過去の悩みとの関わり方の振り返り]が現れているエピソード

エピソード 3
調査対象者：わたしも悩んだなーって思って。高校の頃。そういう話を、高校生の話を聞くことで前の自分のこととか思い出しちゃいました。 調査者：例えばどういうことを思い出したか、言える範囲で教えてもらってもいいかな。 調査対象者：友達関係とかですかね。そこらへんの悩んで、友達に相談しにくいし。部活の先輩に相談するって人もいたんですけど、わたしは何か、そこから、結局同じ学校だし、なんかそこから漏れちゃうのも嫌だなんて思って、結構ひとりで溜めるタイプだったんで。そういうの思い出して、短い間でも、そういうのを話せる場、（カタリ場は）結局友達と一緒にグループなんでどこまで深い話かっていうと、そこはわからないんですけど、話すって大事だったなって、そう思いました。
エピソード 4
調査対象者：話を聞くと、そういうことで悩んでるのかって驚いたりもして。 調査者：驚く？ 調査対象者：わたしとは全然違うところで、違う感じで悩んでる子とかもいて。そうか、私は高校のときそういうのでは悩まなかったけど、もしかしたら友達にはそういう悩み持ってる子もいたのかなって。やっぱり話を聞くと、自分、自分の視点だけじゃ見えないことも見えるし、話してもらえることで気づくことって多いなって思いました。昔の自分に伝えたいとか思ったり。

【過去を振り返ることによる未来の展望】について

このカテゴリは、先に示した【過去の振り返り】を前提としながら、「カタリ場」の参加によって得られた振り返りを現在の自分と関連づける形で捉えなおし、その捉えなおしに基づく形で自らの未来を展望しようとしているものであると考えられる。

先にあげた【過去の振り返り】のカテゴリは振り返りのみが語られたのに対し、このカテゴリは振り返りと同時に自分の未来に関わる語りが見られた点が特徴的であった。この結果は、「カタリ場」における「ナナメの関係」は過去展望に影響を与えるだけではなく、過去－現在－未来の連関の中で現在や未来の展望にも影響を与える可能性があるという本研究の想定を支持するものであると言えるだろう。Table4に、このカテゴリが含まれていると考えられるエピソードを2つ示す。

Table4. 【過去を振り返ることによる未来の展望】が表れているエピソード

エピソード5
<p>調査対象者：私の高校は進学校で、大学行くのが普通で感じだったので、特に社会とは触れずっていうか、勉強して大学に行けばOKみたいな感じ。インターンシップとかも無い学校だったので、そういうのがなくても「カタリ場」とかがあれば、外からの情報ってすごい大事だと思って、そういうのが欲しかったなって。あと、自分からそういうのを求めていなかったなって。そういうのは、高校生の子と話してそれで考えましたね。色々。</p> <p>調査者：色々というのは他にはどんなことなのかな。考えたことがあれば教えてほしいんだけど。</p> <p>調査対象者：あー、ですね。やっぱり昔、むかしの反省っていうんですかね、勉強しておけばよかったとか、あ、あと自分から情報得ておけばとか。そういうふうと思うと、だから今はちゃんとしなきゃって。どんどん外に出てったりとか、そういうのをして、自分の将来を考えなきゃなっては思いました。</p> <p>調査者：自分の将来を考える。</p> <p>調査対象者：はい。昔はなんとなくだったわけで、いや、考えてなかったわけじゃないけど、でも今は前よりも考えないと、今2年で、あと大学生生活半分だから、やっぱり反省は活かさないって感じですね。</p>
エピソード6
<p>調査対象者：自分、進路の話をしたんですけど、彼ら、あ、女の子のグループだったんですけど、なんか、話を聞いてると自分も同じように悩んでたよなーって思って。(その悩みは自分にも)あったあったみたいな。でも、やっぱり、数年とはいえ経ってるわけで、高校生と話しても、こうしたらいいんじゃないとか、こう考えるのはどうかなとか、そういうことって言えるようになって。(高校生と)話しながら、あ、その後になんですけど、昔の悩みって、ちょっといけるように(対応できるように)なってるじゃんって思って。</p> <p>調査者：今は高校生のときの悩みに応えられるようになってるんだ。</p> <p>調査対象者：話してみても、なんか自分少しは言えるようになってるなって。そう考えると、なんですかね。成長してるんですかね、わたし。話してみてもわかったことだから、成長してるなら、その、この先の大学生活のこととか将来のことも、なんとなくは考えてるんですけど、ちゃんと考えなきゃなーって思ってたこともあって。成長してるなら、やっぱり昔に比べたら色々考えられるようになってるのかもって。そう考えると、ちゃんと前向いて、前向いてっていったら変かもしれないけど、この先のこと考えなきゃなって、向き合う力ってついてきてるのかもなって思いました。</p>

【高校生との対話による未来展望】について

このカテゴリーは、過去の振り返りが含まれないエピソードで構成されていた。振り返りは語られず、「カタリ場」における高校生とのやり取りが未来を展望するきっかけになったということを表すカテゴリーであると考えられる。Table5に、このカテゴリーが含まれると考えられるエピソードを2つ示す。

Table5. 【高校生との対話による未来展望】が表れているエピソード

エピソード7
<p>調査対象者：高校生と話していると、彼らが色々将来に悩んでも伝わったし、そうするとやっぱり、私も頑張んなきゃなって気持ちになりますよね。</p> <p>調査者：そうなんだ</p> <p>調査対象者：え、なりませんか？なんか刺激受けるっていうか。私も、もっと具体的に将来のこと、先生になるっていうのはそうだけど、それだけだと漠然としてるし、どういう先生になるのかとか、そのために大学でこれしなきゃとか、そういうの考えないって思いました。</p>
エピソード8
<p>調査対象者：(「カタリ場」のキャストを) やってみて、勿論高校生のためっていうのが一番にはあったんですけど、私、自分の将来ってどこまでちゃんと考えてるんだろって、人の悩み聞いているの、いや、それも大事なんですけど、(人の悩みを聞いている)場合なのかなってふと思ったり。もう少し自分のことも考えないって、人の悩みきいて自分に返ってくるみたいなのは、ぶっちゃけ少しありました。</p> <p>調査者：返ってくるっていうのは、具体的に言うってどういうこと？</p> <p>調査対象者：え、だから、3年、4年になったらどうするのとか、どういうプランで自分進めていくのとか。人の悩み聞いてたら、自分の人生も考えるみたいな感じですかね。</p>

【高校生のときにカタリ場に参加したかった】について

このカテゴリーは、「自分が高校生のときに」という形式で語られることが多いエピソードで構成されていた。上記形式は過去展望と捉えることもできるが、エピソードの全てが「カタリ場に参加したかった」という表現を含む語りで終わられていることから、過去展望を含みつつも、「カタリ場」を体験することでその意味や意義を感じることが出来たという、カタリ場に対する評価の観点が強いエピソードであると考えられた。Table6に、このカテゴリーが含まれると考えられるエピソードを2つ示す。

Table6. 【高校生のときにカタリ場に参加したかった】が表れているエピソード

エピソード9
調査対象者：高校生のときにこういうのあったらよかったのっていうのはすごいあって。 調査者：どうしてそう思うの？ 調査対象者：だって、やっぱり色々な人と話すのって結構大事で、しかも自分がこれからなろうとしている人（大学生）だったりするわけで、そういう人との話って響くよなって思うんです。何かのきっかけにはなったんじゃないかなって思います。
エピソード10
調査対象者：（自分の高校時代に「カタリ場」が）あったら絶対行きますよ！あ、でも授業、授業だから普通にあるのか（行くではなく出席するのか）。あったらよかったなーって思いましたもん。 調査者：自分が高校生のときに参加したかった。 調査対象者：あ、でもそれって、今だから言えるので、高校のときだとちょっと恥ずかしかったかもしれないですけど。でも、今回やってみて、高校生羨ましいなって思いました。わたしはこういう体験なかったなって。

4. 総合考察

本研究は、「カタリ場」に初めて参加した大学生を対象として、その参加における「ナナメの関係」が彼らの時間的展望に与える影響について検討することを目的としていた。その結果、「カタリ場」参加が彼らの時間的展望に与える影響として、【過去の振り返り】や【過去を振り返ることによる未来の展望】、【高校生との対話による未来展望】、【高校生のときにカタリ場に参加したかった】という4つのカテゴリーが得られた。本研究で調査対象者となった大学生は、「カタリ場」において高校生とやり取りをする中で、過去を捉えなおしたり、その捉えなおしをもとにした未来の展望を行ったりしていること。また、参加を刺激として未来を展望していること。そして「カタリ場」を肯定的に評価している可能性があることが示唆されたといえる。

ここで、本研究では「カタリ場」における「ナナメの関係」が過去展望に影響を与えるだけではなく、過去－現在－未来の連関を通して現在や未来の展望にも影響を与える可能性を想定していた。この想定について最も当てはまるカテゴリーは、【過去を振り返ることによる未来の展望】であると考えられる。このカテゴリーには過去・現在・未来の全ての時制が含まれていた。白井（2015）は、川崎（2005a, 2009）の将来のキャリアは現在と過去を参考にしながら将来を展望する、つまり過去と現在と未来をつなげる作業だという指摘を参照しながら、その指摘には、キャリア・デザインは、未来を考えさせるだけではなく、過去からのつながりをつくることによって形成できるという提案があ

ると述べている。また、青年期の時間的展望については、キャリア形成における「過去をくぐって未来を構想すること（白井,2001）」の重要性の指摘や、過去を回想することは未来への展望を肯定的に変化させる効果があることが示唆されてきている（石川,2019）という指摘もなされている。これらの研究から、本研究で得られた【過去を振り返ることによる未来の展望】は、大学生のキャリア形成や適応にとって肯定的に働く可能性のあるカテゴリーであると考えられるだろう。

従来の「ナナメの関係」を取り上げた研究の多くは、その関係が年上－年下関係における年下の青年の未来展望に与える影響に着目してきた。本研究の結果から、「カタリ場」という文脈の限定はあるものの、「ナナメの関係」が年上の過去展望やそれを經由して未来展望に影響を与える可能性があること、したがって、この観点からの検討が今後必要であることが示唆されたと言えるだろう。

今後の課題

最後に今後の課題について以下に2点述べる。

一点目は、「ナナメの関係」の捉え方である。「カタリ場」における「ナナメの関係」は、そのプログラム内という限定された場での関係であるのに対して、従来の研究で取り上げられてきたものは、そのような関係を日常において青年が有しているかどうかという点に着目している。今後はこれらを整理した上で、それぞれの特徴を明らかにする必要があるだろう。

二点目は、本研究の結果は今回の「カタリ場」のプログラムに依存している可能性があるということである。例えば、「カタリ場」は様々な高校に出向いて行われるが、その高校の特徴によって出てくる悩みが異なる可能性がある。そして、出てくる悩みが異なれば、得られるカテゴリーも異なる可能性があるだろう。本研究の知見が今回のプログラムの文脈に依存しているものなのかどうかは、「カタリ場」を対象とした実践報告や研究との比較から検討される必要がある。今後の報告や研究の蓄積が望まれる。

注釈

*1 キャストとは、カタリバの活動に参加するボランティアスタッフ。大学生を中心とした、専門学校生、短大生、フリーターなどによる、高校生にとって年上でかつ世代的に近い若者（上阪,2010）のことを指す。

*2 エピソードの内容については、個人の特定を行うことができないように大意を変えない範囲で表現等の修正を行っている。

引用文献

枝廣和憲（2011）.「斜め（ナナメ）の関係」が高校生の自我発達に与える影響－ピア・サポートプログラムへの展望－ピア・サポート研究,8,11-17.

- 枝廣和憲 (2012) . 「斜め (ナナメ) の関係」が高校生の時間的展望に与える影響－ピア・サポートプログラム開発のための基礎的研究－ピア・サポート研究,9,1-6.
- 枝廣和憲・小原豊 (2017) . 教員養成課程における進路選択自己効力と未来に対する時間的展望 (未来展望) および斜め (ナナメ) の関係の関連 大学教育学会誌, 39 (1) ,101-106.
- 半澤礼之 (2016) . 第4章 時間的展望－過去のとらえかた, 未来の見通し方 中間玲子 (編著) 自尊感情の心理学－理解を深める「取扱説明書」－ 金子書房
- 今村久美 (2009) . 「憧れ」を活用した動機づけからはじめるキャリア教育：NPOカタリバの挑戦 (事例報告, 「後期子ども」の教育エンパワメントの試み-当事者の語りから教育社会を紡ぐ-, 公開シンポジウム) 日本教育社会学会大会発表要旨集録,61, 421-422.
- 石川茜恵 (2013) . 青年期における過去のとらえ方の構造－過去のとらえ方尺度の作成と妥当性の検討－ 青年心理学研究,24,2,165-181.
- 石川茜恵 (2019) . 青年期の時間的展望－現在を起点とした過去のとらえ方から見た未来への展望－ ナカニシヤ出版
- 川崎友嗣 (2005) . 「時間的展望」から見たキャリアデザインとその支援 文部科学教育通信 (教育新社) , 132, 22-23.
- 川崎友嗣 (2009) . フリーターの時間的展望－フリーターは未来をどのように捉えているのか－ 白井利明・下村英雄・川崎友嗣・若松養亮・安達智子 (2009) . フリーターの心理学－大卒者のキャリア自立－ 世界思想社 Pp. 54-76.
- Lewin, K. (1942) . Resolving Social Conflicts Harper & Brothers, New York 末永俊郎訳 (1954) . 社会的葛藤の解決－グループダイナミックス論文集－ 創元社
- Lewin, K. (1951) . Field theory in social science. Ed Dorwin Cartwright. New York: Harper. 猪俣佐登留役 (1956) . 社会科学における場の理論 誠信書房
- 宮町良広 (2014) . 主体性を育む高大接続教育：NPOカタリバとの協働授業から考える 地域と経済,7,73-86.
- 認定特定非営利活動法人カタリバ 「高校生の探究心に火を灯す 出張授業カタリ場」 <https://www.katariba.or.jp/activity/project/katariba/> (2019年6月6日参照)
- 大坪崇 (2011) . ナナメの関係で大学生と語り合う授業-- 「カタリ場」を実施して (特集 走り出せ! キャリア教育) 月刊生徒指導2011年9月号,22-24.
- 澤田英三 (2019) . 子どもにとって「ナナメの関係」はどのような役割を果たしているのか－生徒指導・進路指導において児童生徒の多面性を受容する存在として－ 安田女子大学大学院紀要,24,29-43.
- 白井利明 (2001) . 青年の進路選択に及ぼす回想の効果－変容確認法の開発に関する研究 (I)－ 大阪教育大
- 学紀要第IV部門,49,2,133-157.
- 白井利明 (2010) . 過去をくぐって未来を構想しキャリア形成を促す回想展望法の開発と活用－心理検査との併用と世代間継承の考察－ 大阪教育大学紀要第IV部門,59,1,97-113.
- 白井利明 (2015) . 高校生のキャリア・デザイン形成における回想展望法の効果 キャリア教育研究, 34, 11-16.
- 竹内和雄・池島徳大 (2012) . 「ナナメの関係」を意識した進路指導：進路指導に活かすピア・サポート活動 教育実践開発研究センター研究紀要, 21, 215-220. 特定非営利活動法人いきたす <http://www.ikitas.net/> (2019年6月6日参照)
- 都筑学 1999 大学生の時間的展望 中央大学出版
- 上阪徹 (2010) . 「カタリバ」という授業－社会起業家と学生が生み出す“つながりづくり”の場としくみ 英治出版

付記

本研究は、2018年度北海道教育大学学長裁量経費、地域貢献・連携プロジェクトの支援を得て行われた。

本研究に協力してくださった大学生の皆様と、今回調査対象となった「カタリ場」のプログラムに参加された全ての関係者の方々に感謝申し上げます。

